

学級崩壊の危機に直面する情報教員 - 現状と対策を考える -

藤森洋志

麗澤大学国際経済学部

現在、大学の情報教育の現場で、基礎学力と学習意欲が低下したことなどによって、大学の授業とは思えない驚くべき現象が起きている。この状態を放置するといわゆる「学級崩壊」が大学の情報教育の場でおこっても不思議ではない。学級崩壊によって情報リテラシー教育が成り立たなくなると、学生がネットワークを不正利用したり、逆にネットワーク犯罪等の被害者になる危険性がある。この論文では、情報リテラシー教育の現場における「学級崩壊」の兆候となる現象を報告するとともに、この状況にどう対処すべきかについて、教育体制を含めて提言を試みる。

Crisis of the class collapse in the information education of the university : Indication and the measure

Hiroshi Fujimori
Reitaku University

In this paper, I am discussing it about the problem and measure that are related to the information education of the university. Through the means that foundation scholastic ability and motivation fell off, the phenomenon that the lesson of the university does not seem and should be surprised is awake. If we leave this condition, it is expected so-called that "the class collapse" can break out also in the place of the information education of the university. So, first of all, I report the phenomenon that becomes the indication of "class collapse" in the scene of information literacy education. Subsequently, I point out the risk that the student uses a network injustice and also become the victim of network crime, when information literacy education stops consisting of by class collapse. Finally, I propose how to deal with this situation.

1. はじめに

小・中・高等学校において、教室における秩序が失われ、もはや正常な授業の実施ができなくなっている現象、すなわち学級崩壊が話題となっている[1][2][3]。そして学級崩壊の現象は、いまや大学にまで波及し[4]、特にここ数年、従来の常識では信じられないことがらがおこりつつある。基礎学力や学習意欲の低下によって大学レベルの講義を維持することが困難な

状況は、[5]で示されるまでもなく、多くの大学教員が共通して感じていることであると思われる。

残念ながらこの状況が解消される見込みはたっていない。むしろ、今後ますます悪化していくことが考えられる。18歳人口の減少によって大学全入学時代を目前にした今、以前よりも学力が低い層も大学に入学してくることが予

想されるからである。高等学校以前で「崩壊した」状態ですごしてきた生徒が大学生になって、突然学習態度や生活態度が改まるとは考えにくい。特に学力レベルが中低位の大学においては「大学崩壊」を食い止めるためには、相当の努力が求められるようになるのではないかと懸念される。

「大学崩壊」「学級崩壊」の危機は学科や担当科目にかかわらず、大学教員が等しく直面する問題である。しかし、その深刻さは十分に認識されていないようである。成績優秀な学生が集まる国公立、上位私立大学では大学生の学力低下がささやかれていても、授業をうけることもままならないほど低い学力の学生はごく少数であろうし、また「キレ」てしまったり、教員に対して意味もなく反抗的な態度をとる学生も一部の例外に限られるからである。

また学力が低い大学で教鞭をとっている教員でも、専門科目をもっぱら講義形式で教えているだけならば、授業中の私語や携帯電話が鳴り出すことくらいが気になるくらいで、それほど危機的な認識を持っていないように思われる。

だが、筆者のような情報リテラシー教育を担当する教員の間では、「大学崩壊」「学級崩壊」という事態が、非常に切迫した問題として捉えられている。幸い、まだ「崩壊」という事態にはいたっていないものの、これまでの常識では考えられないような事態がおこっていることも確かなのである。

いわゆる文系の学部・学科において情報リテラシー教育は必修または必修に準じた位置付けがなされていることが多い。そのため、意欲のない学生や学力が低い学生も受講している。また知識を伝達すればよい講義科目と違って、コンピュータを学生に操作させることになるため、その結果生ずるさまざまなトラブルに対処しなけ

ればならない。その最前線となっているのが情報リテラシー教育担当教員である。そのため、驚愕すべき事態に神経をすり減らし、対応に追われながら「大学崩壊」「学級崩壊」の危機に直面しているのが現状なのである。

本論文では、情報リテラシー教育の現場で遭遇した驚愕すべき実態を報告するとともに、これが全面的な「大学崩壊」「学級崩壊」に至らないようにするために、どのような対策を講ずるべきであるのかを提案することにする。

2. 情報リテラシー教育現場における「学級崩壊」の兆候

筆者の本務校では、学部によって若干違いはあるが、情報リテラシー教育は大学入学直後に事実上の必修科目として全員が1年間履修する。非常勤講師として情報リテラシー教育にかかわった、東京都内ならびに東京近郊の私立大学の文系学部でも状況はほぼ同じであるが、半期で履修をすませるところ、集中講義で3日間(15コマ)で、情報リテラシー教育を実施するところもあり、また半日2日間(通算6コマ分)の集中講義で簡単な実習をおこなう大学もある。

本務校と非常勤講師として出講している大学の情報リテラシー科目(いずれも実習を含む)において遭遇した事例のなかから、驚きの大きいもの、頻繁に遭遇した特徴的なものを選んで表1にまとめておく。「私語が多い」「携帯電話が授業中になる」といった一般的なものは除いてある。

表1をみてわかるように、情報リテラシー教育以前、いや大学教育以前ともいうべきものが数多く含まれている。「教室で学習する」という基本的な生活態度が身につけておらず教育よりも、もはや「しつけ」のレベルでの強力な指導が必要とされる状況であることがわかる。現在のところ、このような事象は、まだ散発的で

●基礎学力の欠如

- 資料に書いてある文章が理解できない。課題の問題文が理解できない。
例：「帰省先」の意味も読みもわからない
例：「箇条書きにする」ということがどういうことかわからない。
- 自分のログイン名を正しく書けない。
- 自分の電子メールアドレスが正しく書けない
- 説明されてもログイン名とパスワードの違いがわからない。
- 担当教員の名前を知らない。科目名やクラス名を知らない。
- 課題の提出例に「星野すみれ」と名前の例が書いてあると、自分の名前を書かずに「星野すみれ」と書く。
- 基本的な記号の読み方がわからない。ピリオド、コロン、セミコロン、などでも読みと記号が一致しない。
- ローマ字表記の方法がわからない。
- 日付を記入するときには「月日」だけではなく「年」も記しなさい、と指示をすると、自分の年齢を書いてきた。
- プリンタのことを「コピー機」と呼ぶ。
- 印刷できないことを「コピーができない」という。
- フロッピーディスクをパソコンにセットせずに「データが読めません」という（何度も）。
- 試行錯誤して答えをみつけていくことができない（資料に細かく手順が、完全にそのとおりに記述されていないと行き詰る）

●学習意欲や緊張感の欠如

- 授業に必要なノート、テキスト、プリント、フロッピーディスクなどを持参しない。
- 授業の受講に必須のソフトを購入しない。
- 授業がはじまっても筆記用具・ノートなどを机のうえにださず、カバンの中におきっぱなしにしたままている。そもそも所持していない。
- 筆記用具をもっていてもノートをとらない。
- フロッピーディスクや教材などを教室に置き忘れていく。
- 配布された資料を開くこともなくボーッとしている。
- 実習時も腕をくんで椅子の上でゆれているだけ。注意をしても無反応。
- パスワードを忘れる（始末書を提出させても、さらに忘れる）
- 必須の課題を提出しない。忘れる。
- 授業がいつ開講されてから、かなり日数が経過してからはじめて授業にあわられた。事情をきていみると「大学というのが初めてだったので、よくわからなかった」と答えた。
- 寝坊して試験に遅刻。欠席。
- 考えずに質問をする。資料を見直したりするまえに人にやりかたを聞く（課題の次の行に「ヒント」がでているのに読まない）。

●常識的なルールを守らない。マナーの欠如

- 飲食物をパソコン教室に持ち込む。パソコン教室で飲食する。
- 教室の共用プリンタで印刷結果を放置する。ページ数の多い文書を大量部数印刷して放置
- ゴミをまとめて机のまわりに捨てていく。
- 利用待ちの人がたくさんいるのがわかっていながら、自習室で、荷物で席とりをする。ワークステーションをロックしたまま長時間、離席する。
- 授業中に携帯電話がかかると、机の下にもぐって（隠れているつもり？）通話をする。
- 受講していない授業がおこなわれているパソコン教室に入り込み、授業とは関係のないことをおこなう。
- 教室のパソコンにインストールされているソフトを消去する。スクリーンセ이버、壁紙、フリーソフトなどを勝手にいれる

●無謀行為・不正行為

- 隣の人が使っている（動作中の）パソコンから、フロッピーディスクを勝手に引き抜き、自分のパソコンに挿入した。
- 隣の人がうまくログインできないので自分の ID とパスワードを与え、ログインさせた。
- 自分のユーザー ID を学外者に自由に使用させた。
- 電子メールで女子学生にいやがらせのメールを繰り返し送った
- 受け取ったメールを全学から見える掲示板で公開した。
- 再譲渡不可能なライセンスになっている教材ソフトを学生同士で譲渡した。
- 不適切なコンテンツを WWW サーバーにおいて公開した。

●教員の指示に従わない。反抗する。失礼な態度をとる。

- 平気で大あくびをする（我慢したり隠したりするそぶりもない）。
- 両手をあげて思いっきり背伸びをする。
- 姿勢が悪く、床置きのパソコンの電源を膝でオフしてしまう。
- 飲食の持ち込みを注意されたら教員を睨み付けた。
- 教員に注意をされても横を向いたまま、反応しない。
- 教員に注意されると「こんなことくらいで、あやまんなくっちゃいけないんですか」とつつかかる。
- 受講していない授業にもぐりこんできた学生に注意をし、退出を求めると「僕は悪いことをしていると思っていません」「授業中だなんてわかりません」と主張。
- 大幅に遅刻してくる学生が途中から入場すると授業の邪魔になるので、入り口を施錠すると「授業をうける権利の侵害だ」と主張する。
- 授業中に質問に答えられないと「知りませんよ。そんなの。知る必要ないでしょ」と怒鳴る。
- アンケートに「チョームカツク」「不親切でわかんねーよ」「いばるんじゃねーよ」などという言葉で感想を記入する。
- アルバイト情報誌を開いて読んでいる学生を注意すると「うるせー。授業料払ってるんだから、何しよう勝手だろう」と凄む。学生証の提示を求めると「なんでそんなの見せなきゃいけないんだよ。教務にチクるんだろ」とごねる。

表 1.情報リテラシ教育の現場で観察された状況

ある。教員が厳しくその場で指導することによって、教室全体の秩序を保つことは可能である。

だが常識はずれの行動を平然とおこないなから、「教員の指示に従う」ことを拒否する学生が増えてくるとはや大学の授業がなりたたなく恐れがある。しかもその傾向は年々強くなっていくように思えるのである。

例えば、自分がその科目を受講していないにもかかわらず、教室には入りこんでパソコンを使っている、という事例についてももう少し具体的にとりあげる。このような「もぐりこみ」は、たまたま 1 回起きた、というのではない。

ピーク時では、ほぼ毎週 1 回くらいの頻度で起きていたのである。過去においても、卒業論文の締切に追われている学生が、学内で他に空いているパソコンがなく、切羽詰って授業中の教室に入り込んでくるようなことはあったが、少なくとも学生のほうに「悪いことをしている」という意識は存在していた。そのため注意をし、退出を求めると素直に従っていた。

ところが今年になってからは、そもそも授業中の教室に入り込むことが悪いことだと思いう意識が欠如しているケースが増えた。入り口に「授業中」のプレートが掲示されているにもか

かわらず、授業の途中に堂々と入り込んできて、悠々と通路の真中を歩いて一番前の席に、着席。何をするのかと見ていれば、サークルのピラを作り始める、といった具合である。悪いと思っていないから注意をしても、教員を無視して作業を続けようとする。ようやく口を開けば「そんなに悪いことっすか」「あやまんないといけないんすか」と全く反省の色がない。

また別のケースでは、授業開始前の休み時間から教室にもぐりこんでいた学生がいたため、注意して退出を求めると、「僕はこういう短い文章だから、すぐに保存できるけど、卒論で長い文章をつくっている学生なんかすぐに終われないではないか。授業だからといって、でていけ、というのは迷惑だ」とまで言うのである（ちなみに、授業の教室以外にもパソコンが利用できる自習専用の部屋はあり、夜間 8 時くらいまで利用できる環境は整っている）。

このような学生の行いを放置することはできないので、相当な労力をかけて説教をしなければならいことになる。かくして授業の相当部分の労力が、本来求められている授業の実施ではなく、小中学生なみの「しつけ」に割かれるのが実態なのである。

3. 危機の矢面にたつ情報リテラシ教育担当教員

このような「しつけ」をはじめとする諸問題は、本来は大学以前の段階で解決されているべき問題である。また、情報リテラシ教育担当教員だけが対処すべきことでもないはずである。だが、そのような建前は別として、情報リテラシ教育担当教員は、これらの問題に否応なく対応しなければならない状況にあることも現実なのである。

情報リテラシ教育が、スタンドアロンのパソコンでワープロソフトや表計算ソフトの使い

方を教えていれば済んでいた時代ならば、コンピュータ資源を不適切に使用したとしても、その影響は当該マシンに限られていた。しかしネットワークに接続された環境になると、その影響は従来と比べ物にならないほど広範にわたる。「しつけ」のできていない学生がネットワーク環境で傍若無人に振舞うことによって生ずるトラブルは、野放しにしておけば増大し、かつ深刻になっていくであろう。

電子メールの使い方、WWW による情報発信なども情報リテラシ教育の一環に組み入れられるようになり、かつ、大学がそのための資源を学生に提供している以上、それが不正な目的や不適切な形で利用されることを防ぐのは、大学としての務めである。また無知や不注意によってネットワーク犯罪やトラブルに学生にまきこまれないように、気を配ることも必要である。このような対処の前面にたつのが情報リテラシ教育担当の教員ということになるのである。情報リテラシ教育担当教員の負担は、今後さらに増大することはあっても、軽減されることは考えにくい。

今のうちから現実を直視し、対策をはじめなければ、遠くない将来、大学の情報リテラシ教育が授業としてなりたらず、また大学のネットワーク資源が不正利用の巣となったまま放置される時代に突入する。このように想像するのは、悲観的すぎるわけではなく、これまで示した兆候を考えると、当然起こりうることでありと覚悟しておいたほうがよいのではないかとと思われる。

4. 学級崩壊を防ぐための対策

2. で報告したような事例に対して、学生がどんな行為をしていても見ぬふりをしたり、注意をしない教員もいる。ひとつひとつの問題に対して、それがおきるつど、根気強く指導をして

いくことが、当然求められる。

しかしながら、「しつけ」や情報教育以前の基礎学力が不足している現状に対して、情報リテラシ教育担当教員が個人的な努力で解決できる点は、さほど多くない。本来「しつけ」をおこなう専門化ではない情報リテラシ教育担当の教員が、やむをえない事情のなかで、なんらかの対応をせまられている状況を考えると、その解決の全てを個人に押し付けるのは適切ではないし、また押しつけられても不可能である。

大学の組織として問題を直視し、組織としての対応ルールの策定と、そのための体制を整えないかぎり、「大学崩壊」「学級崩壊」の悪夢は、すぐに現実のものとなる。そこで、どのような対策をとるべきであるか、議論の叩き台としての試案を提示する。

(1)現状を直視し公式な行動を開始する

まず、本論文で報告したような状況を、教員同士のグチのレベルではなく、大学上層部まで含めた全教員の間で、認識すべきである。そして全学レベル（または学部・学科レベルで）公式な対応を開始すべきである。このような現状は目を背けたくなるし、また信じたくない気持ちもわからないではないが、「気がつかないフリ」は状況をますます悪化させるだけである。

(2)大学としての方針を明確にする

大学全体（または学部・学科）として、授業における指導方針やネットワーク資源の利用ガイドラインを定め、これが実をもって運用されるような運用基準などを定めるべきである。これには不正や不適切な行為があったときの、処分などの基準も定めておくべきであり、個々の教員によってバラツキがでないようにする必要がある。

このような「管理の強化」は大学には馴染まないことである。「校則」を守らせている中学・高校などを彷彿とさせ、情けなさを感じる人もいるはずである。しかし「野放し」状態にした結果、ネットワークを通じて世界中に迷惑をかける可能性があることを考えると、ネットワーク資源を学生に利用させる大学は、管理者としての責任を果たさなければならない。そのためには、実効のある管理・教育がなされなければならない。

統一した方針に基く管理・指導は、教育的な側面でも不可欠である。ある教員がいくら厳しく指導しても、他のクラスでは同じことをしてもまったく注意されずに、放置されているのは問題である。教員によって対応が甘かったり厳しかったりすると、学生は注意されたことを「たまたま厳しい教員にあたったからうるさくいわれた。運がわるかった」としか認識しない。教員一人が孤軍奮闘しても、効果はでないのである。

(3)十分な教員の配置をおこなうこと

情報リテラシ教育担当教員の採用・配置については、懸念すべき傾向がある。それは担当者を専任教員ではなく非常勤講師でまかなおうという動きである。私学においては、情報教育へのニーズが高まる反面、大学経営をとりまく厳しい環境を反映して専任教員の採用を抑制する傾向にある。このため、情報リテラシ教育については、もっぱら非常勤講師の採用でまかなう、という方針がとられやすい。高校などでも「特別非常勤講師」制度を活用して民間の専門家を情報リテラシ教育にあてようという動きがある[6]。「情報リテラシ教育など本来、大学がやるようなことではないが、ニーズはあるから開講だけはしておこう。だが専任教員が手をくはずまでもないから、非常勤講師にまかせ

ておけばよいのだ」と公言する人もいる。

しかし「しつけ」ができていない学生にネットワーク環境でトラブルなく利用させるのは至難のことである。その負担を何の支援もなく非常勤講師に押し付けるのは問題がある。もとより教育技能や専門知識について非常勤講師と専任教員で差があるわけではない。

しかし大学としての方針も明示されず、同じ教科を担当する他の教員との交流もない状態で、ここにあげたような学生を「押しつけられた」非常勤講師は当惑するしかない。非常勤講師に委嘱するのであれば、それに対する十分な専任教員ならびに大学当局の支援が不可欠である。残念ながら、この点ではほとんど何の対策もとられていないのが現状である。

5. おわりに

以上、大学の情報リテラシ教育現場における「しつけ」や「学力の低下」から生ずる問題について報告するとともに、この状況に対してどう対処すべきであるかについて叩き台を提示した。しかし、この問題は情報リテラシ教育の枠組みだけで議論すべきことではない。当面の対処はおこないつつも、大学教育全体のなかで「しつけ」や基本的な学習態度が身につけていない学生に対してどう対峙するのかをさらに議論していくことが必要となるはずである。

参考文献

- [1] 朝日新聞社会部「学級崩壊」,朝日新聞社,1999
- [2] 河上亮一「学校崩壊」,草思社,1999
- [3] 和田秀樹「学力崩壊」,PHP 研究所,1999
- [4] 中岡慎一郎「大学崩壊」,早稲田出版,1999
- [5] 岡部恒治、戸瀬信之、西村和雄「分数がでない大学生」,1999
- [6] 文部省「バーチャル・エージェンシー「教

育の情報化プロジェクト」報告」,文部省
(<http://www.monbu.go.jp/news/00000356/index.htm>),1999